『イスタンブル・ワクフ調査台帳』にみる16世紀後半のイスタンブルの
ワクフの実態と都市構造の変容

- オスマン朝初期におけるイスラーム都市の史的研究 2 -

TRANSFORMATION OF THE URBAN STRUCTURE AND WAQF OF ISTANBUL
DURING THE SECOND HALF OF 16TH CENTURY IN 'İSTANBUL VAKIFLAR TAHRİR DEFTERİ'

- A historical study of Islamic city in the early Ottoman period 2 -

守田正志*¹, 篠野志郎*²

Masashi MORITA and Shiro SASANO

In succession to the previous article to clarify a characteristic of Istanbul as Islamic city, this paper focuses on a transformation of physical urban structure during the second half of 16th century by analyzing urban facilities recorded in two Waqf survey registers of Istanbul. As a result, it is recognized that residential areas expanded toward the city wall while the location pattern of facilities changed little compared with the middle of 16th century. This phenomenon is considered as the urban sprawl of Istanbul in the 16th century by the accumulation of individual donations as Waqf.

Keywords : Islamic City, Urban Structure, Waqf, Istanbul, Ottoman Empire

イスラーム都市、都市構造、ワクフ、イスタンブル、オスマン朝

1. はじめに

本研究は、イスラーム社会独特の制度であるワクフ制度を通して、15～16世紀のイスタンブルにみられるイスラーム都市としての特質やその形成過程の一端を明らかにすることを目的としている。

ワクフ制度については、これまでイスラーム研究における様々な分野で検討されている¹⁾。その史料的重要性については、イスラーム建築史および都市史研究でも度々指摘されているが²⁾、特にイスラーム圏の都市の形成や特質を明らかにする上で基本的史料といわれる³⁾。しかし、ワクフ制度がどのように都市構造の形成を主導したかについて、具体的かつ実証的に十分に検討されているとは言い難い⁴⁾。こうした問題点を踏まえ、前稿⁵⁾では、15～16世紀中葉までのイスタンブルを対象に、ワクフ文書やワクフ調査台帳の記述から、ワクフとして寄進された都市施設の種類の所在地を明示し、それら都市施設全般の立地傾向から、ワクフ制度という枠組みの中から現れる当時の都市の構造について明らかにした。

この時代に続く16世紀後半はオスマン朝が盛期を迎えると共に、宮廷建築家シナン(1489-1588)の活躍により、シュレイマニエ・ジャミイ(1550-1557)をはじめとする大規模建造物が都市内に多数建設され、今日に至るイスタンブルの都市景観が形成された時期に相当する。事実、シナンの作品と関連付けた都市の諸相についてはこ

れまでも数多く議論されており⁶⁾、この時期に都市が大きく変化したことは容易に想像される。すなわち、16世紀後半は、イスタンブルの都市形成における両期の一つと捉え得る。こうした議論においては、シナンの作品に代表される大規模な建造物が主に検討され、住居等の小規模な都市の構成要素については看過されてきた。一方で、こうした多様な都市施設を含めて、この時代においても、都市民のワクフによる寄進やその調査は継続して行われていた。実際、イスタンブル内のワクフの調査を命じる勅令が出されており⁷⁾、数点の調査台帳が現在まで伝わっている⁸⁾。ワクフは宗教的寄進であり、寄進された施設の建設とは直接関係するものではない。しかし、これらの台帳にはワクフとして寄進された多様な都市施設が多数記録されており、その情報量の豊富さから、これらの台帳にはワクフとして寄進された多様な都市施設が記録されており、現存しない当時の住居等を含めて、16世紀後半における都市の様態を包括的に検討することができる。

そこで本稿では、前稿で用いた『İstanbul Vakıfları Tahrir Defteri:953(1546) Tarihli』(1546年付けイスタンブル・ワクフ調査台帳、以下『1546台帳』)⁹⁾の分類指標を基準に、約50年後に作成された『İstanbul Vakıfları Tahrir Defteri:1009(1600) Tarihli』(1600年付けイスタンブル・ワクフ調査台帳、以下『1600台帳』)¹⁰⁾の記録

*¹ 東京工業大学総合理工学研究科人間環境システム専攻
博士後期課程・修士(工学)

*² 東京工業大学総合理工学研究科人間環境システム専攻
教授・工博

Graduate Student, Department of Built Environment, Interdisciplinary Graduate School of
Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

Prof., Department of Built Environment, Interdisciplinary Graduate School of Science and
Engineering, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

について、寄進形態や寄進された不動産の立地傾向を比較検討する。具体的には、まず、『1600 台帳』のワクフの記録やワクフの内容について整理し、『1546 台帳』の記録と比較して当時の寄進の実態を把握する。次に、マハッレ (mahalle、街区) や寄進された都市施設の増減の地域的偏差について分析を行い、都市施設の立地傾向の変遷を検討する。以上の検討を通して本稿は、16 世紀後半のイスタンブールにおける、イスラーム都市としての都市構造の一端を明らかにすることを目的とする。なお、以下ではワクフを「個人の寄進行為」として用いることとする¹¹⁾。

2. 『1600 台帳』の概要

16 世紀中にはイスタンブールにおいて、少なくとも 4 回のワクフ調査が行われ、それらのうち 3 回の調査台帳が今日まで伝わっている¹²⁾。そのうち、当該の史料は Tapu ve Kadastro Arşivi (権利証書・土地台帳古文書館) に所蔵されるもので、調査員の経歴や台帳に記録されているワクフの年代から、4 回目に行われた調査の台帳と比定される¹³⁾。本書は Canatar によってオスマン語の原文¹⁴⁾ からトルコ語に翻訳・校訂され、2004 年に出版された。すなわち、『1546 台帳』と『1600 台帳』は、現存する 16 世紀中の調査台帳として最古と最新のものである¹⁵⁾。

『1600 台帳』には、『1546 台帳』同様、男女を問わず、スルタンを除く政府高官から市井の人々に至る多様な階層の都市民のワクフ¹⁶⁾が記録されている。その総数 3,265 件の記録はマハッレ毎にまとめられ、13 のナーヒエ (nahiye)¹⁷⁾ (図 1)、226 のマハッレに整理して記載されている。『1600 台帳』の全 3,265 件の中にみられる日付の内、最も新しい日付はヒジュラ暦 1009 年 (西暦 1600 年)¹⁸⁾である。また、記録中にみられる日付の内、最古のものはヒジュラ暦 861 年 (西暦 1457 年)¹⁹⁾である。従って、この台帳に記録されているワクフは、メフメト 2 世によるイスタンブールの征服後まもなくの時期から 16 世紀末までに行われたものである。『1600 台帳』の記載様式は、記録から寄進者の名前・寄進の日付・記録時に参照した資料・ワクフ財源・ワクフ条件・ワクフ施設などの情報が記され、基本的に『1546 台帳』と同様である²⁰⁾。このことから、『1546 台帳』時の調査は、調査団が実際に各マハッレを訪れ、ワクフの管財人などにワクフ文書やその写しを提出させ、その内容と現状を確認し記録するという手順で行われたと考えられているが²¹⁾、『1600 台帳』時の調査も同様の手順で行われたと考えられる。また、調査の際、以前に作成された調査台帳を参照しながらワクフの内容の確認や記録を行なっている事例もあり、その中には『1546 台帳』を参照したことを示す記述がみられる。具体的には、以前の記録内容と比較して、記録に相違や誤り、変更、漏れ等があった場合には、それら記載の訂正が行われている²²⁾。両台帳での記載様式の相違点としては、ワクフ財源の年収が挙げられる。『1546 台帳』では基本的にワクフ財源の年収が記録されているが、『1600 台帳』の各記録では、『1546 台帳』にも記録されているものには年収が記載されている。しかし、『1546 台帳』のための調査以降、新たに寄進されたワクフの記録の大部分については、年収が記載されていない。このように、新たに付加されたワクフ財源については、年収に関する記録の欠如はあるものの、『1600 台帳』の記載内容により、16 世紀後半のイスタンブール内で都市民のワクフおよび寄進された不動産の全般的な傾

向を把握する上での障害はない。

両台帳ともマハッレやワクフの各記録には通し番号が付してある。しかし、記録されているマハッレおよびワクフの総数は異なっている。『1546 台帳』と『1600 台帳』の両者で、同名のマハッレや同一人物のワクフの記録であっても、異なる番号が付されている場合がある。そこで、本稿では通し番号の混同を避けるため、便宜的に各々の台帳の通し番号に、『1546 台帳』上のマハッレには記号 M を、『1600 台帳』上のマハッレには記号 m を付して表す²³⁾。また、各ワクフの記録は、『1546 台帳』上の記録には記号 V を、『1600 台帳』上の記録には記号 v を付して表すこととする²⁴⁾。ナーヒエについては、付されている通し番号と名称が両台帳で一致しているため、通し番号に記号 N を付して表すこととする。

図 1 ナーヒエの区画

*ナーヒエの境界線は、İnalçık が作成した地図を参考に、筆者が新たに引き直したものである。

3. 16 世紀後半における都市民のワクフの実態

『1600 台帳』の記録にみられるワクフの内容については、ジャミイ、メスジド、メドレセ、学校、ザーヴィエ、店舗、住戸とそれに付属する設備、貸し部屋、倉庫、ハーン、キャラバンサライ、ハمام、屠殺場、水車、果樹園、耕作地といった様々な不動産のほか、現金やコーラン、鍋、皿などの動産が記載されている。これらは、『1546 台帳』に記載されているものと内容や用語²⁵⁾の上で相違が無く、ワクフの対象となるものに特別な変化はみられない。

表 1 は両台帳のワクフの記録について、ワクフの内容を、不動産のみのワクフ、動産のみのワクフ、不動産と動産の両方を含むワクフに分けて整理したものである。

まず、ワクフの記録の総数についてみると、『1546 台帳』が 2,515 件であるのに対し、『1600 台帳』は 3,265 件と、750 件の増加となっている。ただし、『1600 台帳』に記録されている 3,265 件のうち、『1546 台帳』においても記録されているものが 1,587 件である。また、『1600 台帳』において、寄進の日付が 1546 年以前であるにもかかわらず、『1546 台帳』で記録されていないものが 321 件ある。このことは、『1546 台帳』の調査において、一部、確認の漏れや未調査のワクフのあったことを示唆するものと捉えられる。従って、1546 年時の調査以降、新たに寄進が行われたワクフの記録は 1,357 件である²⁶⁾。

ここでワクフの内容についてみると、『1546 台帳』において、不動産を含んだワクフの記録は 1,634 件であるが、そのうち 1,539 件が『1600 台帳』においても引続き記録されている。一方、現金や本などといった動産のみのワクフは、『1546 台帳』では 864 件記録されているものの、そのうち 36 件しか『1600 台帳』において記録されていない。また、上述した 1547 年以降に寄進が行われた 1,357

表1 台帳別にみるワクフの内容

ワクフの内容	台帳 1546 台帳	1600 台帳			
		あり	なし	新	計
不動産のみ	1,228	1,168	268	1,056	2,492
動産のみ	864	36	10	89	135
両方	406	371	38	191	600
不明・その他	17	12	5	21	38
合計	2,515	1,587	321	1,357	3,265

*表注
「あり」:『1600 台帳』の記録のうち、『1546 台帳』にも同一の記録が確認できる記録の件数。
「なし」:『1600 台帳』の記録のうち、寄進の日付が 1546 年以前であるが、『1546 台帳』に記録されていない記録の件数。
「新」:『1600 台帳』の記録のうち、寄進の日付が 1547 年以降のもの、すなわち『1546 台帳』の調査以降新たに寄進された記録の件数。

件のワクフの記録のうち、不動産を含むものが 1,247 件と大部分を占め、動産のみのワクフは僅か 89 件も過ぎない。イスラーム世界で広く行われてきたワクフ制度にあって、動産、特に現金をワクフとして寄進することは、オスマン朝特有の現象として指摘されてきた²⁷⁾。事実、『1546 台帳』では、動産のワクフは全体の約半数²⁸⁾を占めている。しかし、16 世紀末においては極端に減少し、不動産によるワクフが主流を占めていることが判る。こうした動産の記録数の減少要因としては、時間の経過により動産が損失を受けた点を指摘できると共に²⁹⁾、16 世紀中葉からワクフとして現金を寄進することへの可否が議論の俎上に載り³⁰⁾、動産をワクフ制度で運用することへの躊躇があったと推定される。

次に各ナーヒエでのワクフの記録数の変化についてみる(表 2)。全体では、『1546 台帳』での記録数 2,515 件に対し、新たに寄進が行われたワクフが 1,357 件と、『1600 台帳』時において約 54% 増加している。『1546 台帳』には、イスタンブル征服直後からのおよそ 100 年間にわたるワクフが記録されていること、また、両者の調査時の隔たりが 50 年であることを考えれば、16 世紀後半になっても、それ以前と同程度の割合でワクフは行われていたと推測される。この値を基準に各ナーヒエでの増加率の動向を比較すると、各ナーヒエともワクフが増加しているが、地域的偏向が認められる。N08～N13 においては、60% 以上と平均より高い増加率を示しており、N10 および N11 にいたっては、1546 以前の件数を超える数のワクフが新たに行われている。一方、N02～N07 では低調な増加となっており、N02 および N04 では 16 世紀後半に新たなワクフはほとんど行われていないと捉えられる。すなわち、ワクフが盛んに行われた地域には偏りがみられ、図 1 の城壁に近い地域でより活発であったとみなせる。さらに、上述したように、『1546 台帳』調査時以降新たに行われたワクフの大部分が不動産のみである。このことから、征服直後、城壁側の地域では不動産のワクフは少なかったものの、時間の経過とともにその数は増えていき、16 世紀後半になると城壁側の地域においても不動産のワクフは活発に行われていたといえる。

4. 16 世紀後半における都市構造の変容

4-1. マハッレ

図 2 に『1600 台帳』時のナーヒエ、およびマハッレのジャミイやメスジドの位置を示す³¹⁾。『1546 台帳』時と『1600 台帳』時の

表 2 各ナーヒエでのワクフの記録数および増加率

		記録数			増加率
		1546 台帳	1600 台帳		新 / 1546 台帳
			計	新	
Nahiye	N01	268	360	147	54.9%
	N02	126	123	19	15.1%
	N03	55	77	23	41.8%
	N04	157	136	14	8.9%
	N05	299	335	121	40.5%
	N06	229	319	112	48.9%
	N07	598	704	271	45.3%
	N08	62	92	49	79.0%
	N09	250	343	165	66.0%
	N10	122	264	159	130.3%
	N11	138	227	144	104.3%
	N12	35	39	23	65.7%
	N13	151	216	105	69.5%
	その他	25	30	5	20.0%
合計		2,515	3,265	1,357	54.0%

*表注
「新」:『1600 台帳』の記録のうち、寄進の日付が 1547 年以降のもの、すなわち『1546 台帳』の調査以降新たに寄進された記録の件数。
「新 / 1546 台帳」: 各ナーヒエでの、『1600 台帳』にみられる新たなワクフの記録数を『1546 台帳』のワクフの記録数で割った割合。本文注 26 参照。

図 2 『1600 年台帳』調査時におけるマハッレの位置

マハッレの数について、総数および増減についてみると、『1546 台帳』ではマハッレの数が 219 であるのに対し、『1600 台帳』では 226 と、総数としては 7 つ増えている。ただし、『1600 台帳』において新たに記録されているマハッレの数は 9 であり、『1546 台帳』において記録されているものの、『1600 台帳』においてその記録がなくなっているマハッレが 2 つある。これら 9 つのマハッレのうち、m42、m112、m135 では、『1546 台帳』においてマハッレ名に用いられているジャミイやマハッレの存在を確認できる³²⁾。従来、イスラ

ーム圏におけるマハッレとは一つ 表3 台帳別にみる都市施設数

のメスジドに蟄集する人々のゆるやかな結合として形成された空間領域であるとされる³³⁾。このことから、1546年の調査以降、これら3つのマハッレは周辺での人口や施設の増加に促され、同時に調査の利便性も併せて、既存のジャミイやメスジドを中心に、元のマハッレを再分割ないしは新たに再編成して形成されたものと考えられる。実際、m42、m135の周辺では1546年時において既に都市施設の集中がみられる(図3a、図4a)。残るm75、m125、m157、m202、m224、m225の6つについては、マハッレの中心となるジャミイやメスジドが『1546台帳』では言及されていない。

これら6つのマハッレの場所についてみると、m157を除く5つのマハッレがUnkapanıからその北の沿岸部にかけて、あるいはFatih Camii西の城壁に程近い場所に位置している。m157の位置は特定できなかったが、他のマハッレとの位置関係から、都市中部の南沿岸部に位置するものと思われる³⁴⁾。これら6つのマハッレも、先の3つのマハッレと同様の理由から新たに形成されたものであるとするならば、1546年以降、この地域での人口および都市施設の急増が考えられる。

『1600台帳』において記録がなくなっているマハッレはM161、M174である。M174については、『1546台帳』において、メスジドの寄進者のワクフのみが記録されている³⁵⁾。『1600台帳』の調査において、このマハッレが削除された理由は判然としない。M161に関しては、『1546台帳』において、同一マハッレであるM162と重複して記されていたものが、『1600台帳』の調査において改訂されたためである。以上から、記録上では2つのマハッレがなくなっているものの、実際のマハッレとしては1つなくなっていることになる。

4.2. 宗教・公共施設

表3は『1546台帳』と『1600台帳』に記録された都市施設を、前稿の分類項目に準じて計上したものである³⁶⁾。

まず、宗教・公共施設数についてみると、『1546台帳』では、ジャミイやメスジドが231件、イマーレットが6件、メドレセや学校が100件、ザーヴィエが24件確認できたが、それらのうち、『1600台帳』においても引き続き確認できたものは、それぞれ214件、6件、88件、21件である。また、1547年以降ジャミイやメスジドが13件(ジャミイが3件、メスジドが10件)、学校等が15件(うち、メドレセが2件)、ザーヴィエが6件新たに寄進されている。さらに、寄進の日付が1546年以前であるものの、『1546台帳』には記録されていない施設の数も非常に少ない。従って、総数としてみれば、『1546台帳』時と『1600台帳』時において大きな増減はない。また、個別としても、イマーレットは新たに寄進されておらず、ジャミイやメドレセも新たな寄進がそれぞれ3件と2件である。このことから、16世紀後半になると、建築規模が比較的大きな宗教・公共施設については、都市民による寄進があまり行われていないといえる。さらに、施設数に大幅な変化が無いことに伴い、前稿で明らかにした施設の立地傾向からの大きな変化はみられない。すなわち、宗教・公共施設は、16世紀後半においても特定の地域に偏ることなく、

	宗教・公共施設				商業施設			居住施設
	ジャミイ	イマーレット	学校	ザーヴィエ	ハーン	ハمام	店舗	
1546台帳計	231	6	100	24	28	46	4,051	9,151
1600台帳計	228	6	107	28	28	46	4,556	14,027
1600台帳あり	214	6	88	21	27	45	3,964	8,775
1600台帳なし	1	0	4	1	0	1	87	869
1600台帳新	13	0	15	6	1	0	505	4,383

*表注

「1546台帳計」:『1546台帳』の記録に記載されている都市施設数の合計。
「1600台帳計」:『1600台帳』の記録に記載されている都市施設数の合計。
「1600台帳あり」:『1600台帳』の記録のうち、『1546台帳』にも同一の記録が確認できる記録に記載されている都市施設数。
「1600台帳なし」:『1600台帳』の記録のうち、寄進の日付が1546年以前であるが、『1546台帳』に記録されていない記録に記載されている都市施設数。
「1600台帳新」:『1600台帳』の記録のうち、『1546台帳』の調査以降新たに寄進された記録に記載されている都市施設数。

表4 各ナーヒエでの店舗数と居住施設数およびその増加率

Nahiye	店舗			居住施設		
	1546台帳計	1600台帳新	増加率	1546台帳計	1600台帳新	増加率
N01	344	24	7%	1,050	573	55%
N02	252	13	5%	649	55	8%
N03	116	7	6%	294	139	47%
N04	687	27	4%	1,675	98	6%
N05	902	52	6%	1,590	465	29%
N06	252	21	8%	1,035	282	27%
N07	499	155	31%	1,462	1,030	70%
N08	24	10	42%	60	148	247%
N09	327	65	20%	550	438	80%
N10	171	50	29%	233	368	158%
N11	207	26	13%	146	307	210%
N12	56	7	13%	89	58	65%
N13	214	48	22%	318	422	133%
総数	4,051	505	12%	9,151	4,383	48%

*表注

「1546台帳計」:各ナーヒエでの、『1546台帳』の記録に記載されている店舗および居住施設数。
「1600台帳新」:各ナーヒエでの、『1600台帳』の記録のうち、『1546台帳』の調査以降新たに寄進された記録に記載されている店舗および居住施設数。
「増加率」:店舗、居住施設それぞれにおいて、「1600台帳新」の値を「1546台帳計」の値で割った割合。本文注26、注38、注43を参照のこと。

都市のほぼ全域に立地していたことを確認できる。

4.3. 商業施設 (図3a,b,c)

商業施設で(表3)収益性が高く、また建築規模が比較的大きいハーンやハمامについて、新たに寄進されているのはハーンが1件のみである。一方、小規模な店舗は、『1546台帳』で確認できた4,051件のうち、『1600台帳』においても記録されているものが3,964件と、減少してはいるものの、減少の割合は小さい。また、『1600台帳』において、寄進の日付が1546年以前であるものの『1546台帳』には記録されていないものが87件であり、『1546台帳』調査時における店舗の調査漏れは少なかったことがわかる³⁷⁾。一方、『1546台帳』の調査以降に新たに寄進されたものが505件ある。従って、『1600台帳』における店舗数は計4,556件と、微増している。ここで、各ナーヒエにおける店舗数の増加率³⁸⁾をみると(表4)、N07～N13と都市西部において値が高い。一方、『1546台帳』時において店舗が多数所在していたN04やN05を含む都市東部では増加率

図 3 台帳別にみる各マハッレの店舗数および増加数

* 店舗数、居住施設数の計上方法および図版の作成手順については、本文注 31、注 36、注 39 を参照のこと。

図 4 台帳別にみる各マハッレの居住施設数および増加数

が低い。

ここで、店舗数やその増加数について、都市域内での地域偏差をより詳細にみるために、マハッレ毎の店舗数の動向を図示したのが図 3a（「1546 台帳計」）と図 3b（「1600 台帳計」）である³⁹⁾。また、『1546 台帳』時から『1600 台帳』時にかけての店舗の増加数を示したものが図 3c（「1600 台帳新」）である。図 3c をみると、30 件以上増加しているマハッレは m99⁴⁰⁾ の 1 つであり、12 のマハッレで 11～29 件、73 のマハッレで 1～9 件の微増となっている⁴¹⁾。ここで、『1546 台帳』時においてワクフによる商業施設の集中をみた Bedestan 周辺やその北の港周辺（Tahta Kale, Balık Pazarı）には、店舗の極端な増加はみられない。一方、増加率（表 4）の高い N07～N13 は、城壁近くのマハッレを中心に店舗数が増加していることを確認できる。特に、『1546 台帳』時に店舗が寄進されていない城壁近くのマハッレにおいても、店舗の所在が確認できる点は注目される。すなわち、16 世紀後半のワクフによる店舗数に関しては、1546 年以前にみられた特定のマハッレや地域（図 3a）への集中的な増加がみられず、都市全域での平均的な増加を示しており、結果的に『1600 台帳』時では店舗の所在を都市全域で確認できる（図 3b）。しかし、商業施設全体としてみれば、1546 年時までの施設数に対し大幅な増加は認められず、絶対数としては依然として Bedestan 周辺やその北の港周辺に集中する傾向が認められる。

4-4. 居住施設（図 4a,b,c）

居住施設数についてみると（表 3）、『1546 台帳』に記録されている 9,151 件のうち、『1600 台帳』においても記録されているものが 8,775 件あり、若干の減少が認められる。しかし、『1600 台帳』において、『1546 台帳』に寄進の日付が 1546 年以前であるものの『1546 台帳』に記録されていないものが 869 件と、宗教・公共施設や商業施設に比べ、居住施設の調査漏れの多いことがわかる⁴²⁾。また、『1546 台帳』の調査以降新たに寄進されたものが 4,383 件あり、居住施設の合計は 14,027 件となっている。このことから、公共施設や商業施設に比べると、居住施設の増加は著しい。すなわち、16 世紀後半のイスタンブールで、ワクフによる不動産の寄進において中核を占めたのは、小規模な居住施設であったといえる。さらに、各ナーヒエにおける居住施設数の増加率⁴³⁾をみると（表 4）、店舗同様、N07～N13 と都市西部の増加率が高く、N08 や N11 に至っては、1546 年時に対して 2 倍以上もの居住施設が新たに寄進されている。それに対して、N02～N06 の都市東部では施設数の増加率は低く、N02 や N04 では一割未満の微増となっている。

居住施設についても、店舗と同様、マハッレ毎に居住施設の『1546 台帳』時の総数、『1600 台帳』時の総数、および『1600 台帳』時の増加数を計上した結果を図示したものが、それぞれ図 4a（「1546 台帳計」）、図 4b（「1600 台帳計」）、図 4c（「1600 台帳新」）である。『1546 台帳』時において居住施設の寄進数の集中がみられた都市東部（図 4a）では、図 4c をみると、Bedestan の南に位置するマハッレや N01 の南側・北側沿岸部に寄進数のやや大きな増加を示すが、北の港周辺（Tahta Kale, Balık Pazarı）での数的変動の特徴があまりみられない。一方、都市中部や西部をみると、80 件以上増加しているマハッレが散見され、50 件以上増加しているマハッレと併せて考えると、Unkapanı, Fatih Camii の東西、さらに Aksaray 周辺において、その増加が著しいことが判る。すなわち、16 世紀後半に

おけるワクフによる居住施設の寄進の実態として、都市中部から西部にかけて、またその中でも特定地域で顕著に増加している。その結果、Tahta Kale からその北西に位置する Unkapanı にかけての北沿岸部において、居住施設の新たな集中がみられ、居住施設の寄進数が多い地域が都市東部のみならず中部へと拡大するなど、立地傾向にも若干の変化が認められる（図 4b）。また、都市の北西地域は、前述したように、新設されたマハッレの多い地域でもある（図 2）。

こうした、施設の集中する地域の拡大や新たなマハッレの設立状況、さらに先に検討したワクフの記録件数⁴⁴⁾が大幅に増加した地域を併せて考えれば、16 世紀後半では、都市中心部より城壁周辺の地域で人口の増加が顕在化したのではないかと推察できる。

5. まとめ

以上、調査台帳の記録内容から、都市民のワクフの動向や都市施設の増減に関する地域差に着目して考察した。その結果、16 世紀後半になると、ワクフによる寄進は都市中部から城壁に近い地域で、不動産を中心に、より積極的に行われていたと捉えうる。特に居住施設といった小規模な都市施設の寄進の増加は、Unkapanı 周辺の北沿岸部、Fatih Camii の東西、さらに Aksaray 周辺を中心に顕著な増加傾向をみせている。加えて、ジャミイやメドレセ、ハーンといった建築規模の大きな施設の寄進は全体として減少しているものの、地域の核となるジャミイやメスジドの設立は城壁周辺、特に都市北西地域において顕著であり、新たなマハッレの形成もみられた。すなわち、16 世紀中葉から末葉にかけて、Bedestan からその北の港にかけての地域に代表される都市東部での施設の稠密化という現象に大幅な変化はみられないが、寄進された施設の多数確認できる地域が時代の経過とともに、それまでの都市東部から城壁側へと徐々に伸長していることを窺える。このことは稠密化した地域での寄進のための余剰不動産確保に困難が生じ、寄進可能な既存不動産を多数有した、あるいは、施設の新設が可能な遊休地を擁したであろう周辺部の地域へと都市域が拡張していった可能性を示唆するものとも捉えられる。特に、居住施設の寄進数における地域的偏差は、居住地の確保が周辺部へと移行した経緯を例証するものとも考えられる。

都市民によるワクフという限定された枠組みでの現象ではあるものの、前稿でも述べたように、ナーヒエの形成や宗教・公共施設の立地については、当初からイスタンブールの都市全域が等価に扱われていた。それに対し、都市民の定住や商業施設、居住施設といった世俗施設の集中する地域には、時間的なずれが生じていた可能性を指摘できる。すなわち、16 世紀末には、イスタンブールの城壁内全域が居住地域として機能した。換言すれば、ワクフという個々人の寄進の集積が、16 世紀におけるスプロール現象ともいえるイスタンブールの都市域の発展を、補完的に例証するものと捉えられる。

注

¹⁾ 代表的なものとして、次の論考がある。Berns, J. R., *An Introduction to Religious Foundations in the Ottoman Empire*, Leiden, 1986; Johansen, B., *The Islamic Law on Land tax and Rent*, London, 1988; Köprülü, F., 'Vakıf Müessesesinin Hukuki Mahiyeti ve Tarihi Tekâmülü', *Vakıflar Dergisi* 2, 1942, pp.1~35; 松田俊道, 「ワクフの解消について」『中央大学アジア史研究』15, 1991, pp.34~50; Mandaville, J. E., 'Usurious Piety: The Cash Waqf Controversy in the Ottoman Empire', *International Journal of Middle East Studies* 10, 1970, pp.289~308; 林佳代子, 「都市を支えたワクフ制度 イスラム世界の宗教寄進制度の経済的側面」『地中海世界史 3: ネットワークのなかの地中

- 海』, 青木書店, 1999, pp.256-284; 加藤博, 『文明としてのイスラムー多元的社会叙述の試み』, 東京大学出版会, 2001 (初出 1995), ワクフ制度については、特に同書のpp.183-200を参照。Baer, G., 'Women and Waqf: An Analysis of the Istanbul Tahrir of 1546', *Asian and African studies* 17, 1983 pp.9-27; Gerber, H., 'The Waqf Institution in Early Ottoman Edirne', *Asian and African studies* 17, 1983 pp.29-45
- ²⁾ 板垣雄三・後藤明 編, 『事典 イスラムの都市性』, 垂紀書房, 1992. この書は、1988年から1991年までの3年間、文部省科学研究費補助金助成重点領域研究の一領域として、板垣雄三氏を中心に実施された、「比較的手法によるイスラムの都市性の総合的研究」の研究成果をまとめたものである。研究分野は、建築学、都市計画学のみならず、歴史学、経済学、社会学、人類学、民俗学など多岐にわたり、イスラム文化圏に属す多様な地域の都市について比較という視点に立って考察を行ったものであり、ワクフについても各所で取り扱われている。
- ³⁾ オスマン朝下の都市を対象とした代表的な論考を、以下に挙げる。İnalçık, H., 'Istanbul: An Islamic City', *Journal of Islamic Studies* 1, 1990 pp. 1-23; D. Kuban, *Istanbul An Urban History*, Istanbul, 1996; Leeuwen, R. V., *Waqf and Urban Structures: The Case of Ottoman Damascus*, Leiden, 1999; Behrens-Abouseif, D., *Egypt's adjustment to Ottoman rule: Institutions, Waqf and Architecture in Cairo, 16th and 17th Centuries*, Leiden, 1994; 林佳代子, 「オスマン朝の新都イスタンブールの建設」『講座イスラム世界3:世界に広がるイスラム』, 栄光教育文化研究所, pp.305-346
- ⁴⁾ 都市構造や建築とワクフの関係を検討したものとしては、上記の、İnalçık, H., *op. cit.*; Kuban, D., *op. cit.*, に加え、Goodwin, G., *A History of Ottoman Architecture*, London, 1971; İnalçık, H., 'The Hub of the City: the Bedestan of Istanbul', *International Journal of Turkish Studies* 1-1, 1979・80, pp.1-17; 山本佳世子, 「15世紀後半のイスタンブール」『お茶の水史学』25, 1982, pp.1-18, が代表的な論考として挙げられる。また、İpsirli, M., 'Arşiv Belgelerine Göre İstanbul Vakıf Evleri: Müstemilât, Tamir, Kira, Satış, Tarih Boyunca İstanbul Semineri', 1989, pp.183-196, が当時の住宅を具体的に扱った数少ない研究の1つとして挙げられるが、ワクフ文書を中心とした古文書の記述から家屋の構成や売買といった、住宅自体を考察したものであり、他の施設を含めた都市全体と住宅との関係を扱ったものではない。すなわち、イスタンブールの建築・都市を扱った研究の多くは、現存する大規模な建造物に注目するに留まり、ワクフ文書を十全に活用し都市の実体としての形態や構造を明らかにするための実証的な検討が行われているとは言い難い。
- ⁵⁾ 守田正志 他, 「『メフメト2世のワクフ文書』および『1546年付けイスタンブール・ワクフ調査台帳』にみる15-16世紀イスタンブールの都市構造 -オスマン朝初期におけるイスラム都市の史的研究 1-」『日本建築学会計画系論文集』, 第600号, 日本建築学会, 2006.2, pp. 253-260
- ⁶⁾ 代表的なものとして、次の論文集がある。Petrucchioli, A. ed., 'Environmental Design, Mimar Sinan-The Urban Vision', *Journal of the Islamic Environmental Design Research Centre* 1-2, 1987. この論文集には、22本の論文が掲載されている。また、執筆者の一人であるKubanは、論文集に掲載した論文の内容を発展させ、16世紀後半のイスタンブールの様態についての検討も行っている。*cf.* Kuban, D., *op. cit.*, pp.250-333.特に、建築史的な観点からの検討を行っている箇所はpp.270-286。
- ⁷⁾ Refik, A., *İstanbul Hayatı-On Altıncı Asırda(1553-1591)*, Istanbul, 1914 (repr.1988), p.31
- ⁸⁾ イスタンブールにあるBaşbakanlık Osmanlı Arşivi (総理府オスマン文書館)に2冊、アンカラにあるTapu ve Kadastro Arşivi (権利証書・土地台帳古文書館)に1冊の台帳がそれぞれ収蔵されている。
- ⁹⁾ Barkan, Ö. L. and Ayverdi, E. H., *İstanbul Vakıfları Tahrir Defteri 953 (1546) Tarihli*, Istanbul, 1970
- ¹⁰⁾ Canatar, M., *İstanbul Vakıfları Tahrir Defteri 1009 (1600) Tarihli*, Istanbul, 2004
- ¹¹⁾ 守田正志 他, *op. cit.*, p.254
- ¹²⁾ BarkanとAyverdiによれば、4回の調査年代はそれぞれ、1521年頃、1546年頃、1578年頃、1596年頃であるとしている。現存している調査台帳は、1546年頃、1578年頃、1596年頃のものである。*cf.* Barkan, Ö. L. and Ayverdi, E. H., *op. cit.*, pp.VI-VII
- ¹³⁾ Canatar は、4回目の調査の終了時期を、1600年頃としている。*cf.* Canatar, M., *op. cit.*, pp.XV
- ¹⁴⁾ 先に示した原本の複写がBaşbakanlık Osmanlı Arşivi (総理府オスマン文書館)に所蔵されている。
- ¹⁵⁾ 『1546台帳』の史料内容については、前稿を参照。*cf.* 守田正志 他, *op. cit.*, p.255
- ¹⁶⁾ 寄進者の肩書きとして、paşaやağaといったアスケリー層、kadiやimamといったウレマー層、tacir (商人)やkassab (肉屋)、hayyam (テント職人)、neccar (大工)といった商人や職人などが記録されている。また、記録の40%強が女性による寄進である。
- ¹⁷⁾ 「イスラム法官の管轄区」の意。*cf.* Barkan, Ö. L. and Ayverdi, E. H., *op. cit.*, p.VII; Kuban, D., *op. cit.*, p.204
- ¹⁸⁾ Canatar, M., *op. cit.*, v1621
- ¹⁹⁾ *ibid.*, v664; Barkan, Ö. L. and Ayverdi, E. H., *op. cit.*, V572
- ²⁰⁾ 守田正志 他, *op. cit.*, 図2
- ²¹⁾ Barkan, Ö. L. and Ayverdi, E. H., *op. cit.*, p.V
- ²²⁾ 例えば、v1571において、前回の台帳でワクフ文書の署名を行ったMustafaの職業をナーイブとして記録してあるのは誤りで、ワクフ文書にはカーディーと記載されていると訂正している。このほか、v26、v146、v861などでも誤りの訂正がなされている。
- ²³⁾ 例えば、Mahalle-i Yedikule (イエディクレ・マハッレ)は、『1546台帳』では190、『1600台帳』では194と通し番号が付されているので、以後、このマハッレを示す場合にはM190、あるいはm194とする。
- ²⁴⁾ 例えば、Vakf-ı Derviş bin Mahmûd (Derviş bin Mahmûdのワクフ)は、『1546台帳』では1410、『1600台帳』では1654と通し番号が付されているので、以後、このワクフを示す場合にはV1410、あるいはv1654とする。
- ²⁵⁾ 守田正志 他, *op. cit.*, p.255-256および表1
- ²⁶⁾ ただし、この1,375件には、日付が不明なものも含まれている。以降の検討では、この1,375件の記録、およびその記録に記載されている不動産の数を、1547年以降に新たに寄進された増加分とする。
- ²⁷⁾ 板垣雄三・後藤明 編, 『事典 イスラムの都市性』, *op. cit.*, 'ワクフ'の項; 林佳代子, 「ワクフ制度 イスラム都市空間構成の原理」『学術月報』Vol.45 No.8, 1992, p.63など
- ²⁸⁾ 動産のみのワクフと、動産および不動産を含んだワクフの合計は、1,270件である。
- ²⁹⁾ 台帳の記録にも、ワクフ文書はあるものの現金がすでに失われてしまっていることを記録した事例が散見される。*cf.* Barkan Ö. L. and Ayverdi, E. H., *op. cit.*, V34, V693, V2308など。
- ³⁰⁾ Mandaville, J. E., *op. cit.*
- ³¹⁾ マハッレの境界線は不明であるため、マハッレのジャミイやメスジドの位置をマハッレの位置に代用させることとする。各マハッレのジャミイ、もしくはメスジドの位置は、現代地図、古地図、および既往研究で示されたイスタンブールの復元図を用いて確定した。災害等で現存しておらず、古地図にも所在が示されていないメスジドについても、「...ハマムの近くにある」「...門の近くにある」などの記述や、ジャミイやメスジドの名を冠した通りの名から間接的にその場所を推定できた場合には、図に示した。*cf.* İnalçık, H., 'Istanbul', *Encyclopaedia of Islam 2nd edition*, Leiden, 1979-, 巻末図; Ayverdi, E. H., *Fatih devri sonlarında İstanbul mahalleleri, şehrin iskan ve nüfusu*, Ankara, 1958; Ayverdi, E. H., *19. Asırda İstanbul Haritası*, Istanbul, 1958; Ergin, O. N., *İstanbul Şehri Rehberi*, Istanbul, 1934; Ülgen, A. S., *Fatih devrinde İstanbul 1453-1481: haritası, izahatı, indeksler*, Ankara, 1939; Öz, T., *İstanbul Camileri 1.-2. cilt*, Ankara, 1962 (repr.1997)
- ³²⁾ m42の名前に用いられているSultan Bayezit Camiiについては、ナーヒエのジャミイとして『1546台帳』に記録されている。m112の名前に用いられているHacı Ferhad Mescidiについては、『1546台帳』のV1635に記載されている。m135については、マハッレの名称からm136 (M131)と同一のマハッレであると考えられるが、別々に記載されている理由は判然としなない。
- ³³⁾ 林佳世子, 「オスマン朝の新都イスタンブール建設」, *op. cit.*, p.336-340
- ³⁴⁾ m156、m158は都市中部の南沿岸部 (Langaの西)に位置している。
- ³⁵⁾ Barkan, Ö. L. and Ayverdi, E. H., *op. cit.*, V2239
- ³⁶⁾ 都市施設の計上方法についても、前稿に準じている。『1546台帳』における施設数については、前稿と値が異なるが、これは、『1600台帳』と照合することで新たに所在地が判明した施設を含めたためである。ただし、この訂正による施設数の増減は僅かであり、施設の立地傾向に大きな変化をもたらすものではない。従って、前稿の検討結果に大きな修正を必要とはしないと判断される。*cf.* 守田正志 他, *op. cit.*, pp.256-257
- ³⁷⁾ このことから、図3aで示した『1546台帳』調査時の店舗の立地傾向に、大幅な変更は認められない。
- ³⁸⁾ 『1600台帳』で計上した店舗数のうち、1574年以降に寄進された店舗数を、『1546台帳』での店舗数で割った割合とする。本文注26参照。
- ³⁹⁾ 寄進された不動産には所在するマハッレが基本的に記載されているため、マハッレ毎に各不動産数を計上しプロットする。*cf.* 守田正志 他, *op. cit.*, pp.256-257; 本文注31および36
- ⁴⁰⁾ m99における店舗の正確な増加数は40件である。
- ⁴¹⁾ 残りの140のマハッレでは店舗数は増加していない。
- ⁴²⁾ ただし、この値を図4aに加算しても、図4aに示した居住施設の立地傾向に、大幅な変化は認められない。
- ⁴³⁾ 『1600台帳』で計上した居住施設数のうち、1574年以降に寄進された居住施設数を、『1546台帳』での居住施設数で割った割合とする。本文注26参照。
- ⁴⁴⁾ 同一寄進者によるワクフを別々に記録している事例はごく僅かであり、記録件数を寄進者数とみなすことに問題は無いと判断される。